日本をキリストへ
協力
4

「日本をキリストへ」
伝道団体連絡協議会
〒101　東京都千代田区神田駿河台2-1
OSCCビル日本福音クルセード気付
TEL 03-295-4414

伝道団体連絡協議会に期待すること

羽鳥　明

私は伝道団体連絡協議会の一員として、四つのことを考えてみたいと思います。

一、伝統的、聖書的、福音的な信仰の立場に立つべきである

すべてがここから起こり、すべてがここで守られることを感じます。その内容は

①聖書が神の誤りない言葉であるという聖書観の上に立つべきです。いらざる対立や議論を避けつつも、明確に聖書信仰の上に立つべきです。

②これを基盤として聖書的、福音的な救拯観、宣教観、教会観に立つべきです。このことを具体的に言うならば、

・全人類は失われており、救いを必要としている。

・イエス・キリストこそが全き唯一の救い主である。

・人々は悔い改めて、キリストを信じ、人生の変革を経験すべきである。

・この使命を達成すべき本体は教会である。

・宣教の業における障害は私たちの不服従である。

二、宣教のために正しい積極的、現実的な協力をすべきである

①教会、教団、教派という縦割りの協力

このために日本福音同盟があると思います。

②日本各地域の協力体制

今こそ地域の協力体制を大切にしていかなければならないと思います。

③伝道団体の結束

教会に仕えつつ、全体的な協力の粘着力にならなければならないと思います。

一九七四年に開かれたローザンヌ世界宣教会議のモットーは、ワン・ロード、ワン・ボディ、ワン・タスクでした。つまり

・協力の基礎はワン・ロード。ひとりの主イエス・キリストが協力の基盤です。

・協力の母体はワン・ボディ。イエス・キリストのからだとして一体である、このユニバーサル・チャーチこそが協力の母体です。

・協力の目的はワン・タスク。神のみ心の一番奥底にあるのは世界宣教です。

三、積極的、現実的、実践的なビジョンに立って行動すべきである

①私たちは悲観的であってはならないと思います。イエスは目を上げて畑を見なさい。刈り入れは多いと言われました。イエスは、天に上る前、弟子たちに「あなたがたはわたしの業をなし、さらに大きな業をするであろう」と言われました。

②ビジョンにともなう活動をすべきです。

全日本の未伝地に目を開き、調べ、それに基づいて現実的な目標を立てるべきです。

③実践的、行動的にビジョンに取り組んでいかなければなりません。

四、聖霊のお働きと主権を崇め、助けと傾注を祈り求めるべきである

祈りが結集されてくるところに、聖霊の降臨、盈満があり、肉の力、肉の知恵が排除され、宣教の大業にあたっていくことができるのです。

関西にて懇談会開かれる

去る八月三一日、大阪クリスチャン・センターにおいて伝道団体連絡協議会の関西懇談会が開かれました。東京から姫井が出かけ、関西に本部または支部のある伝道団体に連絡し、集まっていただきました。

参加されたのは、

日本ミッション ― 高原幸男師、児玉博之師

日本伝道者協力会 ― 高木慶太師

いのちのことば社（卸部、ライセ・センター、クリスチャン新聞大阪支局、聖書刊行会） ― 辻 喜男氏

国鉄福音同志会 ― 高見勝平氏

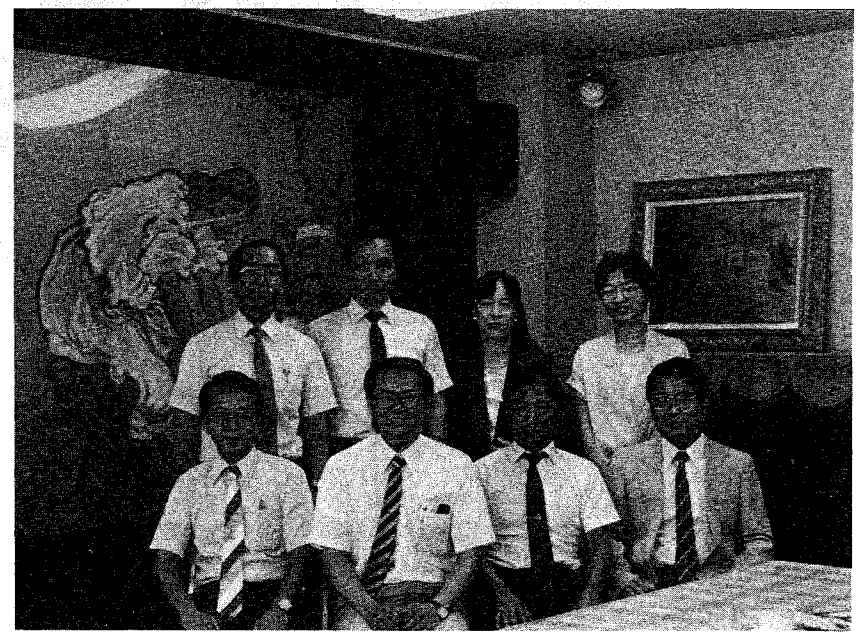
全日本福音宣教会（未加盟） ― 宮脇姉、前田姉

総動員伝道委員会 ― 姫井。

自己紹介と各団体の紹介、情報交換を行ないました。

今後このような情報交換会が関西でも必要だろうかということに関しては、関西は狭く、あらゆる会合でいつも一緒になるので必要ない、ということでした。

フェスティバルに関しても、関西での開催は場所、経費、実益など考え合わせると無利だとのこと。音楽コンクールや芸術展のようなものを組み合わせれば動員につながるだろう。東京でのフェスティバルの時に発行されたガイドブックを、信徒のため、教会の活用のためを考えて、宣伝的な具体的活動の紹介、本の値段、集会やキャンプの会場・期間・費用などを載せるとよい。伝道団体の年鑑をこのような型で発行すれば利用価値があるのではないだろうか。フェスティバルの参加者だけに配布しないで、全日本の教会に頒布してはどうか。積極的な意見交換のなされた懇談会でした。（報告・姫井）

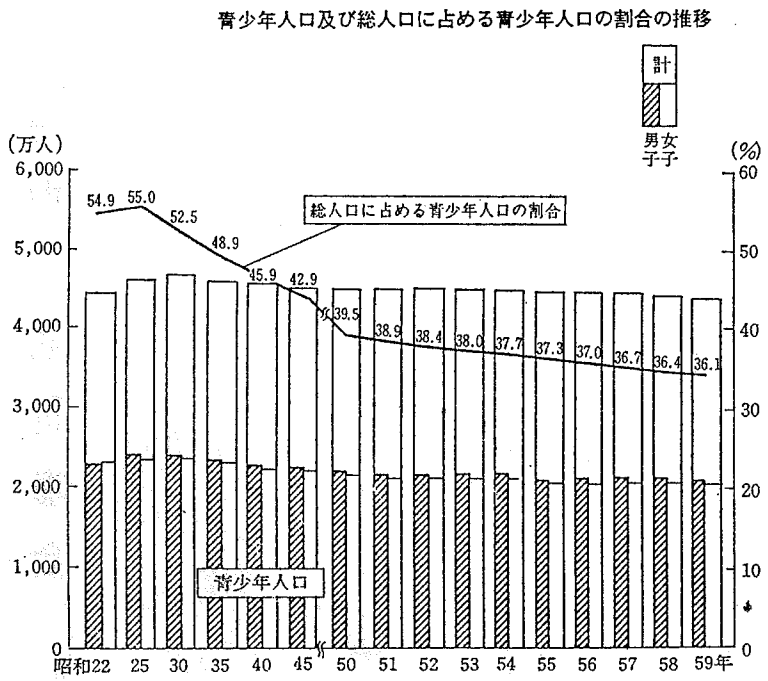


一九八七年は「青少年」の年

十一月二十～二一日、例年のように箱根・小涌園で伝道団体連絡協議会の一泊研修会が開かれます。そこで、役員会では、そのためのテーマを考えました。それが「青少年」ということになったのです。

つい最近出版されました「青少年白書」によりますと、

一九四五年以降　復興期における（戦後）混乱期
一九五五年以降　高度成長の新たな出発期
一九六五年以降　総合的な青少年対策の展開期
一九七五年以降　多様化する青少年対策期　となっています。

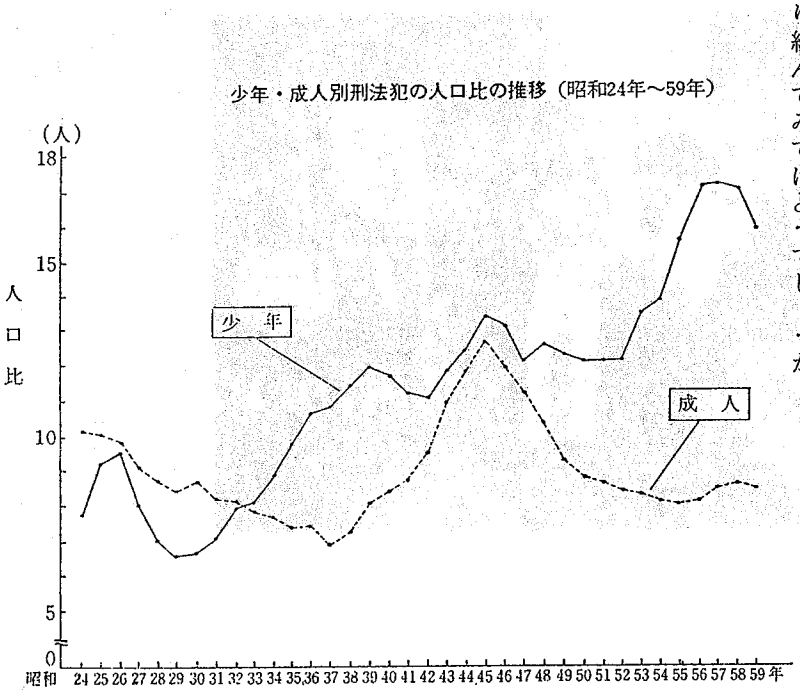


資料出所　総務庁統計局「国勢調査」,「全国年齢別人口の推計」
（昭和51～59年各10月１日現在）
（注）　昭和50年以降の数値には沖縄県を含む。

左上の図は人口にしめる青少年の人口比です。下降線をたどるように青少年の人口は少なくなっています。ところが左下の図を見ますと刑法犯の青少年のしめる率は高くなっています。人の数は少ないのに、犯罪を犯す人の数はグーッと増えています。これからの日本を担う青少年がこの状態であることに心を痛めるものです。

白書を見ますと、学校対策、職業対策、健康対策、家庭対策、社会環境対策、社会福祉対策がなされているのです。

さて、このような青少年に対し、教会は何を、どのようにやっていけばよいのでしょう。伝道団体が来年、心を合わせて青少年問題に取り組んでみてはどうでしょうか。



資料出所　法務総合研究所「昭和59年版犯罪白書」
（注）　人口比は，少年人口及び成人人口のそれぞれ1,000人に対する検挙人員の比率である。

箱根一泊研修会

◎一九八六年十一月二十日(木)　午後一時　受付
　　二一日(金)　昼食後　解散
◎箱根　小涌園
◎会費　一万二千円
◎参加者目標　五十～六十名

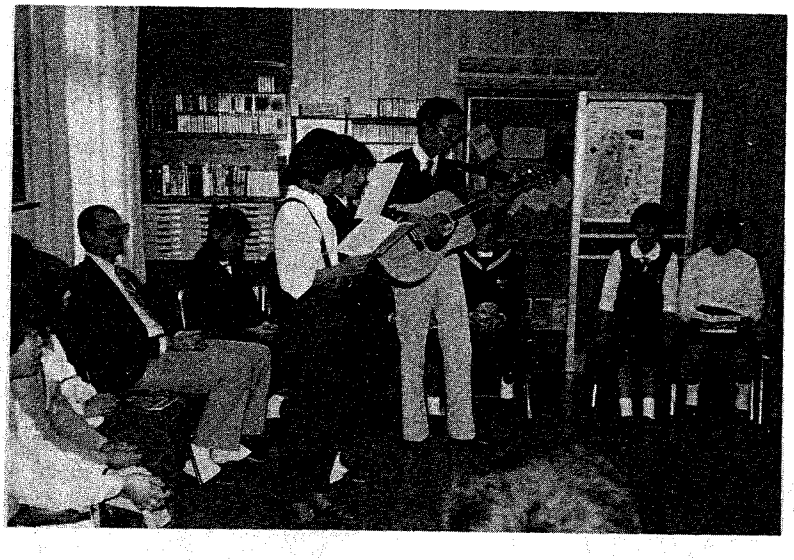
前頁にも書かれていますように〝青少年（12歳～25歳）〟に的をしぼった伝道を一九八七年度の目標にしてみようと話し合いました。

各団体がそのことを覚えて建設的な意見や企画をもって、一泊研修会にご出席くださることを期待しています。

青少年は、これからの教会形成と宣教のために可能性を秘めた大きな存在です。この年齢の人々をいかに救いに導き、教会に導き入れるかが課題です。各年齢層には、その年齢層の人たちによって伝道するのが最善のようです。中学生伝道は中学生によって、高校生伝道は高校生によってというわけです。そうなるためには、その年齢層のクリスチャンを伝道の出来るクリスチャンに育てていかなければなりません。部活に取られてしまっている彼らを、部活よりもおもしろくて、やりがいのある教会活動を教会がもっていないと当然そちらに行ってしまいます。週一回の教会より、毎日やっている部活の方が彼らには興味があります。毎日、何かを彼らと一緒にやるほど教会にプログラムがあり、エネルギー、人材があればいいのですが、とてもそこまでいっていません。

彼らは、部活という活動面ともうひとつ、入試をひかえての勉強面があります。勉強に追われている子どもは、塾や図書館に出かけていきます。そこで、教会が共同学習の場を提供すれば、彼らは来るでしょうか。

彼らは、自分たちで何かをしたいと思っているでしょうか。とすれば、青少年が自分たちで作り出す月刊紙。青少年伝道を対象とした集会（キャンプや特別伝道会）のテープを録音させ、それを活用するように励ます。青少年が吹きこんだテープによるテレホン伝道。個人伝道用のパンフレットやトラクトも彼らにあわせたものを作る、など、いろいろなアイデアが、この研修会で出され、それらを各団体の専門的な分野で実施していくとすれば、すばらしい進展をみるのではないかと思うのです。



青少年という範囲を25歳までにしています。大学生、勤労青年も含んでいます。

何かが具体的に生み出されてくる研修会になればと思います。おもしろいアイデアをもってきて、ワイワイ、ガヤガヤ、楽しく語り合いましょう。

各団体からおおぜいの参加者が与えられるようにと祈り、期待しています。

参加なさる方々の氏名を早目に事務局までお知らせください。

箱根で何が生まれてくるのか、楽しみです。

●発行日　一九八六年十月十五日
●発行者　本田弘慈　●編集者　姫井雅夫